

冬大会個人発表まとめ
フリードリヒ・ニーチェ『道徳外の意味における真理と虚偽』について
—芸術と認識をめぐって— 石橋 諭

本発表は、フリードリヒ・ニーチェの処女作『悲劇の誕生』（以下『悲劇』とする）（1872年1月）と『道徳外の意味における真理と虚偽』（以下『道徳外』とする）（1873年6月）における芸術と認識の比較を通して、人間の生に関する思想の変遷を示すことを目的とした。

まず、『悲劇』においては、唯一の实在である〈根源一者〉が苦しみから救済されるために創造し続ける〈仮象〉が我々の現象世界であるとされる。この世界は、〈仮象〉が唯一の实在へと一体化しようとするディオニュソス的なものと、個体や〈仮象〉を形成するアポロンのなもの、という二つの芸術力により説明される。『悲劇』においては、芸術にのみ唯一の实在との妥当な関わりが認められ、認識によっては物の本質は把握しえないとされる。しかし、人間がディオニュソス的な芸術によって世界の本質を把握した場合には、自身の仮象性が自覚され、生存しないことが最善であるという「悲劇的な認識」に至るとされる。

『悲劇』の課題は、我々の仮象性から生じる「悲劇的な認識」と生の否定に対して、いかに生を是認しうるのかという問題である。『悲劇』では、形而上学的な二つの芸術力によってのみ真の实在との関わりと仮象への志向の双方を維持し、生を是認しうるとされる。その際、認識は生の是認に否定的に関わるのみである。

他方で『道徳外』においては、把握し得ない物自体からの働きかけによって、人間が絶え間なく一回的な形象を創造し続けることが、根本的な芸術衝動として前提される。さらに、人間は認識によってだけでなく、芸術によっても物の本質を把握できず、創造され続ける形象の内部にとどまらざるを得ないとされる。これは『悲劇』の形而上学的な世界観とは異なっている。

このような『道徳外』の世界観においては、人間は絶え間ない形象創造のために常に不安的な状況に置かれるとされる。そのため、社会的な生存が必要となった時に、一回的な形象の差異を捨象し、言葉と事物の固定的な対応と一般的な意味を可能にする概念が発生したとされる。『道徳外』では、概念によって初めて認識が可能になるとされるが、このような概念や認識は社会的な生存と安定をもたらすと同時に知性が生存に隷属し固定化する危険をも持つとされる。

ニーチェは、社会的な人間にとっては概念による固定化と形象の芸術衝動の双方が不可欠であると認めている。その上で、一回的な形象による直観に基づくことで、固定化した言葉と事物の関係の可変性を自覚し、通常とは異なる言葉の使用する言語芸術によってこの関係を変更することで、知性を生存への隷属から相対的に自由しうると主張する。

以上の考察から、本発表では『悲劇』における形而上学的な二つの芸術力による生の是認という思想から、『道徳外』における言語による芸術行為を通じた相対的な自由という思想へと変遷したと主張した。

質疑応答では、『道徳外』における芸術の理解に関して多くのご指摘をいただいた。本発表にとって最も本質的な指摘は、『悲劇』におけるディオニュソス的な芸術が『道徳外』におい

2018年5月16日発行

ては言及されないというだけでは、『道徳外』の芸術の意味、さらには生の思想が『悲劇』から「変遷した」とは主張できないことである。この点の証明には、同時期のニーチェの思想においてディオニュソス的芸術によっても物の本質は把握できないとされることを論証する必要があるが、本発表はそれを行っていない。『道徳外』の時期における芸術の位置づけは、『道徳外』以前の著作である『悲劇』だけでなく、それ以後の著作とも関わる問題であり、今後も考察を続ける必要がある。